



フィクション

夢は、何を映しているのか。

夢は、現実の再生ではない。  
だが、作り話とも言い切れない。

フィクションと呼ばれる形式の奥で、  
何が露出しているのか。

それは、ときどき、  
人よりも先に現れる。

これは、夢占いの話ではない。  
爆発は怒り、崩壊は不安、という置き換えの話でもない。

象徴を解読すれば安心できる。  
意味があれば整理できる。

だが夢は、整理のために現れるわけではない。

同じ一日を過ごしても、  
何も残らない夜がある。  
形だけが残る夜がある。

誰かの前では整っていたものが、  
夜に、崩れて現れることがある。

その日は、何も起きていなかった。

言葉は整っていた。  
場も乱れていなかった。

だが、選ばなかった言葉があった。  
止めた思考があった。

夜、建物が崩れた。  
音はなかった。

これはフィクションなのか、ノンフィクションなのか。

目が覚める。

カットがかかったみたいに、  
天井の白が戻る。

だが、切り替わらないものがある。

夢は物語を借りただけだ。  
出ていたのは、その日の状態だった。

それは、その人のものでもあった。


夢は作り話の形式をしている。  
だが、作られているわけではない。

思考の配置。  
沈黙の重さ。  
未処理のまま残ったもの。

それらが、映像という器を選ぶ。

人は、整ったままではいられる。  
だが、残ったものまでは消えない。

夢は嘘をつかない。  
ただ、説明をしない。

A misty, golden-hour landscape with a lake and mountains. The sun is low on the horizon, creating a warm, golden glow that reflects on the water. The sky is filled with soft, hazy clouds, and the overall atmosphere is serene and contemplative. The text is centered in the middle of the image.

映っていたのは、出来事ではなく、  
まだ外に出ていない、その人の内側だった。



Edition — 存在の芯  
別景：フィクション

著者：美学思想家 古川玲奈  
発行：Raffiné  
2026